

# (十七) 進駐軍用材時代(上)

昭和20年秋頃から、連合軍・進駐軍の兵力が増強されるにつけ、兵員及びその家族が、居住する兵舎宿舎が必要となってきた。これに対応する為、マッカーサー司令部から日本政府に対し、兵舎・宿舎を建築する木材の供出が命じられた。そこで山林局が各府県に対して、その供出材の割当てを行った。供出材の価格は当時制定の公定価格で各府県より発駅価格で買入れ、占領軍に対しては無償で供出した。負担額は、終戦処理費で処理されるとのことで、窓口は特別調達庁なるものが新設された。

政府は、其等供出材を各県・各発駅から集荷し、連合軍が指定する場所へ輸送し、連合軍に引き渡しを行わなければならなかった。供出材は内地材の生産県で、戦時中に軍用材を供出していた府県へ命ぜられた。当時全国的に店所及び組織を持っているのは、私の会社、即ち日本木材社しか無かった。当然特別調達庁が、日本木材社に対し、政府の代行機関として、各府県より供出材を各発駅から集荷し、連合軍が指定する各キャンプへ納入引き渡しする代行業務を、日本木材社が一括引受けた。当初は、富山県は生産県で無いので、供出材割当ては無かった事と同時

に、重要都市でも無いので、進駐軍のキャンプも無く、殆ど私の店所には無関係であった。段々日が経つにつれ、当初は日本国内のみだったものが、東洋に進駐する連合軍及び米軍用の兵舎・宿舎用材の納入へと拡大変更された。昭和21年春頃から、長野県・新潟県の一部、石川・福井県等、所謂信越地区の供出材が、伏木港に集結し、同港から沖繩・釜山・仁川・硫黄島・奄美大島等各地へ船積みされるという情報が流れ始めた。以上のような状況の変化から、不便な

輸送されてくる供出材を保管した。国外向けの本船7、8千屯クラス1艘が入港すると、倉庫に満杯だった製材品も、一度に空になった。十屯単位の貨車で、1回に7、8百両分を積み込むのである。本船で、製材品を積み込み輸送する経験が初めて知り、海上輸送の醍醐味も初めて味わった。本船に託送する、インボイス(製品明細書)作成に大変時間を費やした。2日も3日も本船は満載のまま待っている。勿論滞船料が要する。これも初めての経験であった。本

も宜しい。製材品の寸法は、長×中×厚に分類すれば、110種類くらいであった。インボイスは、樹種混入で、長×中×厚に分類して、夫々の数量を把握して、一括して作成しなければならぬ。本船一艘で約7、8百貨車分の明細の集計である。如何に徹夜して集計してもまとめるには集計係の窓口で制限があり、人数のみ多くても良いと言ふ訳ではない。

そこで私は考案した、小僧のころ、祖父が父に、木材の数量調べに、ウグイスなるものを習った事

そこで締め切り本船に積み込まれた貨車のウグイスのみ綴り紐を切る。裏の社員寮二間続きを全部解放して、男女全所員手分けして同類項集合である。カルタ取りの様なものである。まとまった分からはインボイス作成に掛かる人員も別に編成した。第2回目は全所員手分けしてウグイス方式を採用した為、一晩でインボイスが出来上がった。「出航ラン」には、1日も2日も余裕が出来て、お陰で「デスパッチ」を頂いた。本店から請負制を宣言されていたから、本店所の剰余金となった。

他の店所は依然として、デマレージを支払っていたが、私の店所は「デスパッチ」の連続であった。本店では問題になった、富山出張所のみがデスパッチとはおかしい、富山の「デスパッチ」の秘法を公開せよとのことであったが、私は応じなかった。最後に、村上社長から、会社全体の為だから、大きな気持ちで発表せよと命じられ、止むを得ず本店の会議の席上で発表した。途端に、そんな簡単な事かと冷笑され、大変残念であった。月給は会社から頂いているから、仕方無いと思った。今日のような、自由競争激しい時代であるから、ちよつとしたアイデアの積み重ねが、同一業種でも、将来企業の優劣を決定するのである。いわんや中小企業に於いては、尚更の事であると、私は信じている。

いよいよものがたり  
善くは翁記